

若いトーマス・マン

——ある芸術家の成り立ち、一八七五—一九二一——

リチャード・ウインストン

(ジルヴィア・ホーフハイנטツ独訳)

岡光 一 浩 訳

一、祖先と幼年時代

リユーベック——ここには水と赤れんが、回廊と円塔、丸い舗石と破風屋根がある。ヴァケニツツとトラウヴェエの、ふたつの河に挟まれた起伏のある楕円形の島に位置するこの町は、平坦な北ドイツの平原に聳える堂々とした高みであるように見える。巨大な塔をもつゴシック様式のがつしりとしたふたつのれんが造りの教会、聖ペトリ教会と聖マリーエン教会がこの町の中心に聳えている。マリーエン教会はリユーベックの市政を司る長老たちによって利用されていたので、市参事会教会と呼ばれていた。この教会はこの町の中心的役割を果たし、この都市国家の自信と由緒ある商人たちの行動力のひとつの象徴であった。ヨーロッパのたいいていの都市では司教の居所である大聖堂は、しばしば司教の宮殿や他の教会の建物のすぐ隣か向かい側の、町の中心に位置するマルクト広場にあるのだが、リユーベックではそれは、この町の南北軸の最南端に移された。この旧市街の中心部に君臨しているのは、トーマス・マンが洗礼を受けた市参事会教会とルネサンス風のファサードをもつ市庁舎であり、その近くの旧市街への入り口に立っているのが堅固なホルステン門である。ずんぐりした同じよう

なふたつの塔をもつこのどっしりした建物は、グリム童話の挿絵にも出てくるようなものである。

今日もなおリユーベックは、ゴシック様式とルネサンス様式の過去の建物を多く保持している。十九世紀末までここには、まだはつきりと中世後期の雰囲気を感じられた。前世紀半ばの活発な建設工事によって破壊の危機にさらされたものを、古いものの保存に努める市民精神が維持し、同時にまた修復することを望んだ。進歩的な考えをもった人々——トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』のなかのハーゲンシュトレームのような男たち——は交通障害をきたしていたホルステン門を取り壊すように主張したが、市参事会における投票において、リユーベックの過去の栄光に対する保守的な誇りが一票差で勝利を得たのであった。このハンザ自由都市はこの古い建築物の修復のために資金を捻出し、このホルステン門にかわる仕事は一八七一年、ドイツ帝国が布告された年に終了した。

リユーベックの通りに聳えるいくつもの破風、そのいくつかは鋭く一直線に伸びているものもあるが、階段状になって中断されるもの、また感じの良いバロック風の躍動を見せるものもある。それはこの町がはるか西にあるフランドルやオランダの町々と緊密な結び付きを持っていることを立証している。この類縁性が確認できるのは、運河やマスト、活気のある港の波の上を穏やかに揺れ動く船の煙を吐く煙突、港湾地方特有の臭い、圧倒的に金髪で彫りの深い顔立ちの住民たち、そして低地ドイツ語の喉音などにおいてである。しかしリユーベックの最も有名な息子である一八七五年六月六日にこの地で生まれた作家は、フランドルやオランダとは違った町との和合を好んだ。つまり、トーマス・マンが小説『ヴェニスに死す』の舞台として選んだ町ヴェニスには彼に強く故郷の町を思い出させ、この町を彼はリユーベックの「南方の姉妹」と呼んだのであった。また童話的なヴェニスという理解も幼年時代の最も慣れ親しんだ遺産である、と彼は主張している。ヴェニスの総督邸にマンは、リユーベックの市庁舎の回廊を映し見たのであり、その回廊ではリユーベックの自負のある市民たちが株式取り引きをしていた。そのなかにはマン自身の多くの祖先たちもいたのである。このふたつの町は内海に面しており、ヴェニスがかつて地中海の女王であったのと同様、リユーベックもバルト海を支配していた。このふたつの町の名声を育んだの

は商人たちであったが、ヴェニスが極東から真珠や絹織物、香料を調達したのに対し、リユーベックは北方の木材や魚や塩で貿易をした。生活必需品は贅沢品に比べて多くの利益を生むことはなく、そのためリユーベックの富はヴェニスのそれと比べて比較にならないほど少なかった。また、彼らが貿易をするその品物は彼らの気質にも影響を及ぼしている。——勿論、特定の品物とある種の気質との間にあらかじめ内的な関連がない場合のことであるが。しかしいざれにせよ、物質的なものに固執する揺らぐことのないリユーベックの豪商と、活発で芸術を好む南方の商人とを取り違えることは決してありえなかつたろう。だが両方の商人とも、その遺産を大いに誇りとし、貿易や商人の冒険的な生活を尊敬すべき生活様式とみなす都市貴族であった。そして両者とも自由というものに大きな価値を置いていた。——少なくとも彼ら自身に関して言うなら、彼らは必ずしも下流階級に属してはいなかった。

リユーベックはヴェニスに比べると、およそ八〇〇年若かった。しかしこの町は相変わらず十分名譽を重んじていたので、将来の作家に歴史意識や、伝統に同調する正当性を付与することとなった。トーマス・マンはリユーベックについてほとんど包み隠すことなく書いてある。例えば、『ファウストゥス博士』のなかでリユーベックをカイザー・スアッシュェルンと呼び、次のように描いている。「……この町は古い。そして古いということは現在するものとしての過去、現在がまさしくその上に積み重なっている過去のことである。」リユーベックはキリスト教に改宗したあるスラブ系の公爵によって十一世紀に礎を築かれ、破壊と再生を越えて、その後の十三、十四、十五世紀に最もすばらしい繁栄をした。この町はその後、半帝半同盟として大変長い間ヨーロッパの貿易を支配してきた重要な都市同盟であるハンザ同盟の押しも押されぬ首長に発展した。リユーベックの法律を享受したり、リユーベック・スタイルの建物を建てたりすることが、北ヨーロッパの小さな十二の小都市の野心となった。

この町が興隆した数世紀の間、特殊なタイプの冒険好きの商人たちがこのリユーベックの政治的社会的な生を支配した。このリユーベックの商人たち、つまり冷酷無情な実業家たち、勇敢な船乗りたち、そして陸海の恐れを知らない闘う商人た

ちはすでに以前より、それぞれの支配者たちからの独立を勝ち取るために争っていた。彼らは実際、絶対的な権力を有するようになり、神聖ローマ帝国皇帝直屬の封建領主として町を統治し、ほとんど皇帝と同等の権利をもって市民との交渉にあつた。いろんな民族国家の興隆によつてそうした都市共同体が没落の運命にさらされた後もずっと、誇りをもつたこのリユーベックの寡頭政治の執政者たちは絶望しながらも、ハンザ同盟の崩壊を避けようと努めた。彼らは「最後の、大きな、巧妙なやり口の退却戦」を闘つたのである。ちようど彼らの後継者であるトーマス・マンが後に、歴史の動きを阻止しようとして自分自身の労苦を書き記したように。

マン家は、リユーベックを支配する都市貴族の家系に属していた。だが、彼ら自身古くからここに定住していたわけではなかつた。いやそれどころか、彼らは決して北ドイツの出ではなかつた。この家族の系譜の根底を逆にたどつてゆけば、バイエルン、フランケン、スイスに及ぶ。トーマス・マンは、自分の祖先が「ドイツが世界の隅々へ、そして極東まで送り出したあの種のニュルンベルク職人」であつた、と回想している。その始まりにおいて、マン家はフランケンにおいて農夫であり、ニュルンベルクにおいて仕立屋であつた。その祖先のいく人かがバイエルンに留どまり、休息を知らない野心のあるいく人かが南ドイツの丘や山を後にして、北ドイツの低地に向かつた。マン家の人々が、その最も簡単な生活資料についていくらかだけでも知ることのできる最初の祖先は、一六四四年エルベ河畔のバルヒムで生まれたヨーハン・マンであつた。彼はその近くのグラীবで市参事会員になり、布地商人組合の会員になつた。彼は自分のことを「とてもよく告白する」人物であり、この町を破壊したある大火によつて彼が財産のすべてを失くしてしまつたという記録が残つている。しかし、その後の彼に残されていた人生の数年、「全能の神がその生涯の終わりまで彼の日々のパンのため」の面倒をみたのであつた。彼の息子ジークムントは布地職人としてロストックに定住した。その息子も同じように、ヨアヒム或いはヨアヒム・ジークムントという名前をもつが、彼でもつて、長年にわたつて家庭用聖書に記載された一家の年代記が始まつている。この家庭用聖書にはさまざまな出来事が描かれており、トーマス・マンは『ブッデンブローク家の人々』を書くとき、それらを扱

所にしたのであった。

トーマス・マンの高祖父（曾祖父）と原文にはあるが誤りである（記者）にあたる一七二八年生まれのヨアヒム・ジークムントは彼自身の告白によれば、役立たず同然の人間であり、何度か不思議な運命によって救われた後、ある種の情熱的な敬虔さに捉えられた。子供のとき彼は、姉の結婚式にビール樽が落ちて来てほとんど死にそうになったし、三度あやうく溺れそうになったことがあった。その後彼は、非常に厳しい仕事に対しても尻込みすることのない、とてつもなく丈夫な若者に成長した。彼は父の仕事を引き継ぐことを拒否し、商人になり、ビール醸造人になり、そして船乗り兼船大工の家族に嫁入りした。彼の息子はリユーベックに移住し、そこで穀物取り引きにかかわった。——これはビール醸造人の関心からさほど離れている仕事でもなかった。そして彼は、穀物商、並びに取り次ぎ及び運送業のヨーハン・ジークムント・マン商會を興したのだった。

このヨーハン・ジークムント——トーマス・マンの最初の長編小説のなかで老ヨーハン・ブッデンブロークとして描かれている一家の創立者——は十四歳の時リユーベックにやってきた。ケーゼラオという名のリユーベックの商人が、このヨーハン・ジークムントとロストックの聖霊降臨祭の市場で知り合い、彼をかわいがり弟子として家に引き取った。後の一七九〇年、ケーゼラオはヨーハン・ジークムント自身が商売を始める際に援助を惜しまなかった。トーマス・マンがふさわしい引用として『ブッデンブローク家の人々』のなかに再現している次の言葉（この作品のなかでは、この言葉は意図的に古風に表現されている）はヨーハン・ジークムントの、息子に対する警告であった。「わが息子よ、日中は業務にいそしむべし、されど、夜となりて安らかに眠りうる仕事のみをなすべし。」作家トーマス・マンはこの言葉にとりわけ道徳的な規則を重ね合わせたが、創立者の息子の二代目ヨーハン・ジークムントは、この言説を、あまりに危険な輸出業に手を出すという警告として理解した。父と同じ名前をもつこの二代目ヨーハン・ジークムントは、書かれてあったこの言葉を理解する能力をもつ家族史のなかの最初の頃のひとりだった。彼は、それまでの家庭用聖書に慣例的に書かれてあった誕生日と死亡日の

簡潔な記載の代わりに、比較的詳細な「私の生涯のスケッチ」を描き、そこに毎年行っている自分の旅についての短い報告を書き加えた。『ブッデンブローク家の人々』の家系図は当然マン家のそれである。各世代のこの一家の構成員たちは家庭用聖書の中の、以前に記載されていたものを書き写し、それらをひとつの二つ折りの紙入れにまとめていた。トーマス・マン自身、家族史のこうした詳細を、領事ブッデンブロークが湾曲した蓋付きの大きな褐色の事務机から取り出す古い革の書類入れを描写する際に使用した。

ロストツクの布地商人の後継者であるヨーハン・ジークムントには実に早く、歴史的伝統に適った家族意識が伝えられた。ハインリヒもトーマス・マンも後に、歴史的な長編小説を書いたが、それは「現在するものとしての過去」に対する彼らの感情の自白の表現であつた。ハインリヒ・マンは長編小説『愛の狩獵』のなかで次のような疑問を提出している。「世に生まれて来るとき、我々はなにを望むのか。血のなかにないものや、我々の外側にあるものではない。すべて我々のなかにあるものを望むのである。」トーマス・マンは公的に自分の生涯について報告するときはいつも、まず最初に自分の精神的遺産について話した。彼の最初の大きな文学的行為は彼の近い祖先の世界の研究だつた。何度も何度も彼はこのテーマに立ち返り、身体と魂の秘密に満ちた連続性を世代と種族を越えて把握しようとする。そして最後に彼は、あらゆる子供が祖先の生活のなかへ織り込まれていることの最も明白な象徴を、カストルプ家の洗礼盤において見付けたのであつた。つまり、「そこには父の名もあれば、祖父自身の名も、曾祖父の名もあつたこの^{ツル}△^{ツル}という接頭語が、祖父の口のなかで二つになり三つになり四つになると、孫の少年は頭を横にかしげ、瞑想するような、或いはほんやり夢想するような眼つきで、口を慎ましくうっとりとして開いて、この曾^{ツル}曾^{ツル}曾^{ツル}という音に耳を傾けた。——それは、墓穴と時間の埋没を意味する暗い音であつたが、それと同時に現在の少年自身の生活と、遠い過去に埋没した時代との間の敬虔な連鎖を意味し、…この曾^{ツル}という虚ろな音には、宗教的な感じと死の感じと歴史の感じとがまざりあつていた。」

二代目ヨーハン・ジークムント・マン（創立者の息子でブッデンブローク領事の「モデル」）はわずか九年の結婚生活後、

最初の妻を失った。彼の二番目の妻エリーザベト・マルティでもって、この家系のなかにスイスの血筋が入って来た。同じように穀物取り引きをしていた彼女の父はグラールスに、十四世紀までさかのぼることのできるスイス農民、商人、刀鍛冶の一族の子孫として生まれた。一九三二年以後のドイツの政治的展開によってトーマス・マンは、まず最初にスイス亡命へと駆り立てられたが、それ以来彼のスイス人に対して感じた愛着は、親和力以上のものであつたように思われる。そしてヨーロッパが彼に対して再び心を開いた時、彼はドイツへではなく、スイスの故郷へ帰ることを決心したのであつた。彼のこの選択は、ドイツ語圏の最南端の地域である、母方ならびに父方のマン家の祖先の発祥の地への帰還としても理解されよう。トーマス・マンもハインリヒも二人とも再三再四、彼らの「血」のなかのこうした様々なものの混入について指摘している。そのような「血」に関する観念と概念は十九世紀末に大いに好まれ、二十世紀にはこうした人種的理論は熱狂と嫌悪をもつて考察されるようになった。実際、家族というものは素質、衝動、推進力、立場や伝統を次々に生み出していくものである。

スイスを出た後、曾祖父のヨージ・ハインリヒ・マルティは数年間ロシアで生活し、リュウベックとマン家に、ある種の世才に長けた生き方を付与した。彼は全生涯において、故郷に対して敬愛の念をもち続け、ほとんど毎年グラールスを訪れるのを常としたが、その際、彼は自分の馬車でドイツを横断して北から南へ上つて行つた。(彼が自分の馬車をもつていたということは、彼の裕福な生活スタイルを表している。)グラールスが二一八七年飢饉に襲われた時、マルティは、リュウベック、ハンブルク、キールや近隣の町で金を集め、五週間のうちに「二三、二三八マルク分の通貨をいろんな種類の硬貨で、例えばルイドル、カロリン、デンマーク・グルデン、オランダ・グルデン」⁸をかき集めた。彼はこの金額を窮乏し

*「ブッデンブローク家の人々」におけるトーマス・マンのこの素材の取り扱いは、「本当の生活」とは違った彼の姿勢を推察させる。この長編小説のなかで、彼はこの妻の死去を前の世代に移している。創立者は恋愛結婚し、最初の妻との「短い一年」を(特徴的なことだがフランス語で)「私の人生のなかで最も幸福な一年」と書き記している。

ている彼の同郷人を支援するためにスイスへ送った。

娘の持参金という形でマルテイー——彼をトーマス・マンは当世風の紳士^{カウアリエンツァラモード}レープレヒト・クレーゲルとして描いた——はヨーハン・ハインリヒ・マンの商会にも多額の「マルク通貨」を寄付した。『ブッデンブローク家の人々』のなかの、商会の資本から差し引かれたり加算されたりする金額についての実に事細かな計算は、レープレヒト・クレーゲルのヴェストの宝石をちりばめたボタン同様、文字通りに受け取る必要はない。エリーザベト・マルテイはいずれにせよ、ヨーハン・ジークムント・マンにとつて疑う余地のない良い配偶者であった。彼女が八十歳になった時、彼女の肖像は『ブッデンブローク家の人々』のなかに実物にならつて描かれたようである。一八九〇年の冬に彼女が死亡した時、トーマス・マンは十六歳に近い年齢であつたが、彼はその当時の「叙情的・戯曲的な」文芸段階による最初の小説の習作にかかわつていた。

エリーザベトとヨーハン・マンとの長男であるトーマス・ヨーハン・ハインリヒは一八四〇年に生まれ、二十三歳の時の父の死に際して商会の長の義務と権利を引き継いだ。彼は若い頃から市民の同胞たちの尊敬を得、それを維持した行動力と教養のある実業家であつた。

彼の息子であるトーマス・マンは後に一九二六年、彼の同郷人に対して行つた講演のなかで過去を回想して次のように語つた。「私は人生においてたびたび確認しては口元をはころばせ、まさに現場を取つて押さえたような気持ちになつたものですが、ひそかな模範として私の行動を規定しているのは、やはりもともと亡くなつた私の父の人格なのです。もしかすると今日、父を知つていた人、彼がこの市で、多数の公職を帯びて活躍するところを見た人がどなたか、私の話を聞いておられるかも知れませんが、そういう人ならば、父の気品や賢さ、野心と勤勉、個人的な、そして精神的な優雅さ、全く本当に家父長時代の流儀で父に帰服していた庶民を扱う時の父の親切さ、その社交的才能、そのユーモアを思い出されることでしよう。父はもはや単純な人間ではなく、頑丈ではなく、神経質で悩む能力がありました。自己制御のできる成功に恵まれた人間で、この世——彼がその美しい家を建てたこの彼の世で、若くして名声と名誉とを勝ち得ました。」¹⁰

長男ハインリヒは父のことを「若くて、陽気で、悩みのない人間」と回想した。——そして実際、五歳のハインリヒと一緒に写っている父の写真がある。父は当時の長い露出時間のために必要とされるポーズを取ってカチカチに硬直している。しかしそれにもかかわらず、彼のシャンと伸ばした態度は自然で、自信に満ち、陽気なところを見せている。そして、息子の肩にやさしく一方の腕を乗せ、もう一方の腕で息子を抱えているそのしぐさは、愛情に満ちた様相を見せている。彼は、一〇〇年後の近年再び流行となった濃い口髭をはやした、目立って良い男である。彼のふたりの息子も同じように、第一次世界大戦後その流行は根本的に変わったけれども、生涯口髭をはやした。

ハインリヒ・マン、父自身こう呼ばれるのを最も好んだが、彼はロンドン仕立ての服を着、ロシア煙草をふかしていた。ハンザ都市の裕福な実業家にとつて、このことはそんなに異常なことでもなかったが、明らかに贅沢な趣味をもっていることがわかる。特別な事柄に対してもこれと似た感覚が働き、それに堅実な価値が加わり、彼の花嫁の選択を規定した。その若い女性はまさに今やつと社会に出たばかりであり、——彼がある婚礼の時初めて彼女を見た時、彼女は十六歳半ばであった——彼には全く異国風な印象を与えた。ユーリア・ダ・シルヴァ・ブルーンスは、ブラジルに定住していたリユーベック生まれの農場所有者ルトヴィヒ・ブルーンス（一八二二—一八九三）と彼の妻マリア・ダ・シルヴァ・ブルーンス（一八二八—一八五六）の娘であった。ユーリアは自分の本来の名前がドドーであり、父をパイ、母をマイと呼んでいたことを女友だちに知らせるとともに、原生林と海に囲まれた自分の人生の最初の七年についてすすんで語った。意気盛んに彼女は、ブラジルの農場での生活や祖父母の楽園の島、リオのカーニヴァル、自分のところにいた黒人の保母や父の黒人の奴隷、そして王蛇ブラジルボアとの遭遇などについて報告した。だが、彼女は父親の家系から言えば、四代も続いたリユーベックの商人の出だった。六歳の時母を亡くした後、彼女はリユーベックの中流階級の娘たちと一緒にテレゼ・ブセ全寮制女学校で教育を受けた。（その学校に、トーマス・マンは『ブッデンブローック家の人々』のなかでトニーを、ハインリヒ・マンは『種族の間』のなかでローラを通わせている。）彼女の性質のなかの異国的なものは一連の変化を体験し、抑制されていた。

トーマン・マンの父ハインリヒ・マンがそのような妻を選んだのは、決して愚かなことでも無鉄砲なことでもなかった。それは恋愛結婚であり、名門らしい結婚の決定ではなかったため、一八六九年、その婚約の儀は彼の内輪だけで少々変則的に執り行われた。

ユーリア・ブルーンスは、母がロマン民族系のためブラジルで幼年時代を過ごしたけれども、慎み深く感傷的であり、ドイツの前世紀半ばには普通のことだったような、義務意識に育まれた全くドイツ的な若い女性だった。彼女は芸術的な性向をもち、感情豊かにピアノをひき、リヒアルト・ヴァーグナーという名の妥協を知らない現代的な作曲家に大胆にも夢中になっていた。ヴァーグナーの猛り狂ったような和音は、彼女の性質のなかに隠れるようにまどろんでいる未開拓の部分に反応したらしいが、同時にヴァーグナーのロマン的でゲルマン的な傾向は、自分の夢中さがただ表面的なものにすぎないことを教え、彼女の心を落ち着かせるような確信を与えたのであった。もし彼女が少女時代に彼女の女音楽教師と仲たがいがいしなかったなら、おそらく彼女の音楽の才はもつと伸びていただろう。マリー先生は優しい我慢強い教師であり、小さなドローが非常に感嘆するような柔らかいピアノ・タッチで演奏した。だが彼女の立派な教育は、ユーリアと彼女の妹がカナリアの世話を怠って、そのカナリアが死んでしまった——そのことでマリー先生は彼女らに厳しい非難を浴びせた——時、終わりととなった。

トーマス・マンは母を「きわめて音楽的¹¹」と呼んだ。しかし前世紀の六十年代後半、北ドイツの良家出の若い女性が芸術的な技能を發揮することはほとんどできなかつた。ヴァイオリンを弾くゲルダ・ブッテンブロークのように、ユーリア・ブルーンスもピアノ演奏に没頭できるだけで、それ以外には社交的な気晴らし以上のことをすることはできなかつた。社交的な気晴らしといっても、彼女の後の数年において見られるような絵や文筆の試み^{*}を意味するにすぎなかつたのである。全寮制女学校の雰囲気全体はともかく彼女の考えを結婚に向けてるように仕向けられていた。そして妹マーナの結婚後、彼女の頭の中にあつたことはただひとつだった。「独身のままで、〈老いた処女〉であり続けたくない。そう思っても決して悪いこ

とではなからうと彼女は考えた。¹²」

彼女が老いた処女になる恐れは全く大きくはなかった。彼女はかわいくて、均整の取れた目鼻立ちをしていて、北もずつと北方の人間に特有の角の張ったあごをもっていたが、またそれには晴れやかで色っぽい南方的性質が結び付いていた。「全リユーベック」とかかわるようになるにつれ、彼女は堅信礼後や全寮制女学校の卒業後、招待された多くの舞踏会や結婚式のパーティーに参加するのを大いに楽しみにしていた。彼女の叔母のエンマと叔父のエドユアルトは、幸福なるリユーベックが大市民階級の子孫に差し出す楽しみを、彼女がいくらかなりとも手にいれるように注意を払った。彼女は白い繻子の縁飾りの白い飾り帯びのついた、緑の薄モスリンの服を着てたつぷりと踊った。そして彼女は花を差し出し、お世辞を言う若い男たちに取り囲まれた。だが、彼女は彼らと恋に耽けるとともに、トーマス・マンがトーニ・ブッデンブロークに対して書き添えた、あの大胆さでもって彼らをはねつける術も心得ていた。ある若い男は「一面頬髭を生やし、：別の男はぎよろ目である。また大きすぎる赤い鼻をもった男、大きな偏平足の男、またとてつもなく歯の悪い男などがある」と、彼女は非常に荒っぽく述べている。彼女は周りに群がる求愛者たちの感情を傷付けたことにひどく恥じることになるのだが、その後、十六歳半ばで彼女はいくつかの舞踏会で将来の夫に会い、「彼女の運命は定められた」¹³のであった。

だが、彼女の性格には別の冷静な面もあった。それは、彼女の父が彼女に手紙で婚約のお祝いを言った時強調し、同時に彼自身が指摘したものであった。その時の彼の感情は、彼のきちんと書かれた筆跡同様、堅固な保守性をみせている。その手紙は次のようである。

※(彼女は『ドドーの幼年時代より』という幼年時代の回想、並びに小説、逸話、童話を書いた。また他にも、残存していない作品も確かにある。少女時代、彼女は日記をつけていた。)

リオ・デ・ジャネイロ 一八六九年二月四日

愛する娘ユーリア

今回の便りは私にハインリヒ・マン氏とおまえの婚約のうれしい報告をもたらしてくれました。——私にとつては子供たちが幸福になること、それが私に与えられるすべての心配に対する最上の孝行です。愛するユーリア、おまえはおまえの婚約者を判断する機会をしばしばもちましたし、そのうえおまえはハインリヒに同調さえしていました。ですからおまえがおまえの幸福を彼と見付け出すことができるだろうと私は期待しています。

ハインリヒ・マンとおまえの組み合わせを私が祝福しないわけはありません。愛する娘よ、神がおまえたちを守り、おまえたちの人生の道が平坦でありますように。エドユアルト叔父とエンマ叔母はこの縁組に非常に満足していると書いてきています。私たちみんな、おまえたちが幸福な結婚生活を送るよう希望しています。おまえの婚約者はひとりの娘を幸福にするのに十分の資格を持っていますので、おまえが彼の誠実な愛に報いることが大切です。

大いなる青春時代のおまえには、実際のな生活についての多くの経験や認識が欠けています。それがなければ家庭での幸福は見付けられないだろう。しかし、おまえの選んだ男性に対する心からの愛があれば、おまえは確かに秩序や節約、家庭でのやりくりをうまく行えるように駆り立てられることだろう。そうなればどんな男性でも、いつも妻を尊重するものです。愛する娘よ、結婚生活には太陽の輝きも嵐もあるものです。しかし、後者は、妻が賢くそして立派な性格を示すにつれて、それだけ早く消え去るものです。

おまえの結婚式や、私のそこへの到着についてエドユアルト叔父に手紙を書いておきました。私の心から愛する娘であるおまえのことを心に抱きながら、これで筆を置くことにします。

I. ルイス・G. ブルーンズ¹⁴

結婚式の祝宴は一八六九年六月四日、ふたつの重要な商家の縁組にふさわしく贅沢にかつ豪華に催された。招待状はすべての親戚に、貧しい者にもその他の者にも送られた。トーニ・ブッデンブロークの結婚式に見るように、町の半分もの人々がやって来た。結婚式後、夫婦は短期間、夫ハインリヒ・マンの母の住まいであるメンク通り四番地に住んだ。第二次世界大戦で破壊されたその家は後に再建され、今日「ブッデンブロークⅡハウス」という名で世界的に知られている。その翌年、ハインリヒ・マンはブライテ通りにアパートを借り、そこで一八七一年三月二十七日長男が生まれ、その子はルイス・ハインリヒ・マンと名付けられた。

所帯を持った後、マン領事（彼は父親と同じように、オランダ王国の領事に任ぜられた）は、その翌年ブライテ通り三十六番地に家を買った。だが、マン家の次男は郊外の夏の別荘で生まれた。それは一八七五年六月六日のことで、その子供はパウル・トーマスと名付けられた。「星位は吉兆であった。後にしばしば占星術の大家たちが星占いに基づいて、私には長く幸福な生と安らかな死が約束されていると証言してくれたように」と、トーマス・マンは後の一九三六年に書いたある人生の経歴において注釈を加えている。マンは神秘というものを実際には信じることはなかったが、上記の発言と正午に生まれたという明確な指摘によって、神秘というものを上機嫌に表現している。似非科学は勿論だが、いつも科学に対して無条件には信じることのなかった彼であるが、世の中が自分にとって親しいものであったという感情を強調するために——私たちが誰もがおそらくそうであろうが——占星術を用いている。

この良い星位という観点は、全くまさに家族のなかの彼の立場において存在した。彼は第二子のもつ長所と短所を感じていた。「私の幼年時代は保護され、幸福であった¹⁶」という彼自身の言葉から、長所が短所を越えていたことは明らかである。彼の道は平坦であった。兄が彼に道を示してくれたからである。——勿論人生の道ではなく、文学への道のことであるが。しかし、弟の方は四歳の年齢の違いをつらい隔たりとも感じていた。トーマン・マンは死の数ヶ月前のある手紙で次のように強調している。「確かにいつも兄は偉大だった!」¹⁷——それは言葉の二重の意味においてそうだった。兄に対して感じた

彼の尊敬はその後も、つまり政治、文学、哲学、生活様式についての意見の違いから彼らの間の公の亀裂を生み出し、彼らがお互いに敵対して印刷物のなかで攻撃し合っていた時でさえも持続していたのであった。トーマスについて言えば、「兄弟同士の世界体験」¹⁸は彼の生活や思想に絶えず影響を及ぼした。尤も弟のトーマスから兄のハインリヒへの流れはそんなに強くはなかったが、ハインリヒが想像したり告白したよりも強かったことは確かである。

兄弟同士の世界体験と同様、家族による世界体験もあった。ユーリアとハインリヒ・マンの二十年の結婚生活の間、さらに三人の子供が生まれた。ルーラと呼ばれたユーリアが一八七七年、カルラが一八八一年、ヴィクトールが一八九〇年に生まれた。二人の妹は兄ハインリヒの特別のお気に入りだった。ハインリヒはとりわけ、若いときすでに魅力的な少女であったカルラに心からの愛着を感じていた。彼女のポヘミア的性向はハインリヒのなかの似かよった琴線に触れたのだった。最後に生まれた息子ヴィクトールは幼年時代、兄たちとかわりを持つことはなかった。彼がしっかりと話をすることができるようになった時、ハインリヒもトーマスも実際すでに大変大きくなっていて、彼は兄たちを大人の世界に属するものと考え、ハイニー叔父、オンモ叔父と呼んだのだ。意気消沈して、いわゆる青春時代の「春の嵐」を耐え忍んでいた十五歳のトーマスにとって、この末の弟はほとんど存在しないに等しかった。ヴィーコー（ヴィクトール）はその遅い誕生という運命によって影のような存在に見られたのである。彼は「取るに足らないもの」としてであるが、兄たちの作品において、実際に彼が占めていたよりも本質的に重要なひとつの役割が与えられていた。およそ十五歳の頃トーマス・マンは、ある意味では私は一人しか兄弟（ハインリヒ）を持っていない、別のもう一人は誰も争いなんか出来ないような良い弟であると語った。だがヴィーコーは兄たちの文学的才能をわずかしか受け継いでおらず、彼においては決して兄たちと同じような才能の開花は見られなかった。そのため彼はこうした自分に与えられた立場に恨みを感じていた。生涯の終わりに彼が、ひとつの自伝を書いたことは家族を驚かした。そしてその作品に彼が与えたタイトルが「私たちは五人だった」であったことは、彼のこうした怒りから出た気持ちを強調しているように思える。この自伝のなかで彼は、マン家にはもう一人男がいて、

兄や姉たちに続いてしんがりに生まれた自分は、決して奮起しても希望に満ちた名声を勝ち得ることなどできないほど、つねに兄姉たちのはるか後塵を拝してきた、だから「どうか私を置いて行かないでくれ」と言いたそうである。そしてこの自伝の最後で彼は、兄姉たちの考え方においては、絶対的に真実の報告をすればおそらく正当化されたであろうよりもより重要な役割を、自分が果たしていることを書き添えている¹⁰。

家族の写真や分散した思い出はトーマス・マンの幼年時代へのほんのわずかな洞察しか与えない。写真や思い出というのはお定まりのものである。頬のふつくらした子供が写真家の準備を注意深くじっと見詰めている写真。十歳の少年が兄やふたりの妹たちと一緒に写っている写真。またある写真の、下の子供三人には姉弟ならではの類似がはっきりと見て取れる。つまり、同じように円い顎、同じように堅く締まった唇など。十四歳の注目に値するほどきりりとした少年ハインリヒは、その写真ではすべての手順に批判的な不満を見せながらじっと我慢しているようである。自分自身が決めたことなのか、或いは写真家の指示に基づいてなのか、彼は一冊の本を左手にもち、あたかも読み終えたところを知っておきたいかのように、一本の指をページとページの間にはさみ込んでいる。制服姿のトーマスは、おそらく写真家によって指示されたのであろう装飾のある一本の鞭を持ち、進んで若い軽騎兵のポーズを取っている。

トーマス・マンは初期や後期の著作において、自分の幼年時代に関する言及を大部分文学的に様式化した。一九〇四年の自伝的な小品において、彼は子供のとき「とても素晴らしい玩具」を持つていたことを回想している。その玩具には勘定台や秤のある店もあり、引き出しには植民地産の食料雑貨品が詰まっていた。そして穀物倉庫は下流のトラウヴェ河岸にある父のそれと全く同じような種類のものではあった。そこにはクレレンさえもあり、それはハンドル操作で動き、袋や梱を巻き上げることができた。この小さな玩具の店は、父が望んだような特別な野心を息子に目覚ますことはなかったが、商人の仕事に対する彼の尊敬の念をいくらか活発にすることに貢献した。そうした尊敬は『ブッデンブローク家の人々』では間接

的に、「精神的生活形式としてのリユーベック」では直接的に表現され、トーマス・マンの人生形成においてはテーマとして何度も繰り返されている。幼年時代の影響は予期せぬ形で、時には非常に後になって、時には全然気付くこともなく現れていることがある。彼は「鉄色の厚紙でつくった面頬かぶとや、馬上試合用の槍や盾のある完全な騎士の装備」²⁰を所有していたが、それだからといってトーマス・マンは中世の冒険小説作家になったわけではなかった。ちょうど彼の幼年時代の人形芝居が彼を舞台作家にしなかったように。だが中世に対する愛は彼の中にいつまでも残った。勿論それは、リユーベックのいろんな通りによって育まれたものであり、老いた小説家マンによって不吉な共感をもって「ファウストゥス博士」のなかに呼び出されている。そして七十五歳の時創作された「選ばれし人」において、マンは自分自身のパロディの目的のために、気まぐれに騎士の付属品や態度を描いた。人形芝居に関して言うならば、それをマンは、のちにゲーテ模倣^{イミタシテ}のひとつ要素に変化させたのであり、それは、彼の後年における茶化したような、また時として非常にまじめでもあるひとつの習癖であった。

この人形芝居は家族の伝統によってすでに正当化されていた。というのも以前、ハインリヒにも人形芝居に対する興味があったからである。兄の玩具はあっさりとして弟に受け継がれ、弟はそれを自分のものとした。このことは、トーマスが是が非でも自分のものとしての玩具を、ハインリヒがまだ放棄していない時だったら、ときおり苦しみも混じった危険極まる譲渡となつたであろう。ハインリヒは、トーマスがある日壊してしまった小さな四度音程のバイオリンのことを長い間覚えていた。それは幼いころの二人の兄弟間の緊張の種だった。しかし、祖母エリーザベト・マンの贈り物の人形芝居は、二人の兄弟の仲の良い協力をつくるためにはためになったようである。早くから絵の才能をみせていたハインリヒは、多くの独自の素晴らしい書き割りとともに、装飾や人形の蓄えを多くした。共同で二人の少年は「風変わりな音楽劇」²¹を作り、それらは両親や叔母といった感受性の強い聴衆の前で上演されたのであった。

ハノー・ブッデンブロークがあるクリスマスの夕べに、大変待ち切れぬ思いに駆られながら待っている贈り物の人形芝居

は、初期の小説『道化者』のなかにも現れている。この小説でトーマス・マンはあきらかに自伝的な調子で、濁りのない思ひ出を呼び起こして、語り手に、上演の準備のために部屋に閉じこもっている自分の様子を生き生きと描かせている。つまり、

「私の部屋は三階で、そこにはヴァレンシユティン髭を生やした祖先の黒ずんだ肖像画が二枚かかっていたが、私はこの部屋を暗くして、舞台の近くにランプを置いた。人工の照明は気分をもちあげるのには不可欠と思えたのだ。私は指揮者だったから、舞台のすぐわきに席を占め、左手を大きな丸いボール箱の上に置いたが、目に見えるオーケストラというのはこれひとつきりであった。

さて今度は共演する芸術家たちが入場するが、それはことごとく私自身がペンとインクで描いて切り抜き、木型を貼りつけて立てるようにしたものだ。彼らはオーバーをまといシルクハットをかぶった紳士たち、あでやかに着飾った淑女たちだった。

△今晚は▽と私は言う。△皆さん方！どなたもお元氣ですか？私も出てきましたが、まだ少し指図することがありますからね。だが時間はいいようです。楽屋に入りましょう。▽

芸術家たちはみな舞台の後ろの楽屋に入り、間もなく全く姿を変え、とりどりの舞台衣装を身につけて戻ってくる。するとみんなは垂れ幕にあけておいた穴から客の入りのをぞいてみるのだ。劇場の入りは実際悪くないのだった。そこで私は開幕のベルの合図をし、さて指揮棒を振り上げて、しばらくはこの身振りが引き起こした素晴らしい静寂を楽しむ。だが、たちまち指揮棒のあらたな動きにしたがつて、序曲の開始を告げる不安げな、にぶい太鼓の連打が始まる。それは私が左手でボール箱をたたいて出したものである。——続いてトランペット、クラリネット、フルートが鳴り出すが、これもその音色の特徴を私が口で誰も真似のできない仕方です出したものである。こうして音楽が進み、やがて強烈なクレッシェンドのところで垂れ幕が上がると、暗い森か絢爛たる広間で芝居が始まる。

芝居の筋書きは前もって頭に仕組んであったが、細部はその場で即興で作って行かねばならない。クラリネットがトリルを鳴らし、ボール箱が太鼓を轟かせて伴奏する甘美な情熱的な歌に対しては、不思議な調子の高い詩句で大袈裟な大胆な文句を一杯嵌め込んだし、時には韻を踏ませたりしたが、筋道が通る内容は珍しい方だった。しかしオペラはどんどん進んでゆく。その間、私は左手で太鼓をたたき、口で歌ったり楽器を奏したりし、右手は演技者ばかりでなく、その他すべてをきわめて念入りに指揮してゆくのだから、幕切れに感激の喝采がどよめくと、垂れ幕は何度も何度も開かねばならなかったし、場合によると、指揮者は自分の後ろを振り向いて、誇らしげにしかも嬉しそうに場内に向かって挨拶する必要も生じたのである。

全くこういう精根尽くした上演を終えて陶然としながら舞台をしまいこむ時、いつも私は、最善の能力を傾けた作品を勝利のうちに成し遂げた有能な芸術家が感ずるにちがいない幸福な倦怠が身体一杯に満ちてくるのであった。——この遊びは十三か十四の年まで私の何より好きな仕事だった。²²

トーマスは人形芝居を好み没頭した。それは、いつまでも決してその楽しみから離れることなど考えられないほどだった。この人形芝居の没頭に対して、すでに当時最初の文学的な作品を実験的に試みていた十七歳のハインリヒは、穏やかな調子で「トミイ」をからかった。低音の声で歌う大人のトーマスが相変わらず人形芝居を前にして座っている姿を思い起こすのはなんとも滑稽だ、とハインリヒはトーマスを非難したのである。だが、トーマスはすでに、その後の人生ずっと、この「風変わりな遊び」に没頭することになるだろうという発見をしていた。すなわち、彼は人形芝居において舞台装置を必要としたのではなく、「穏やかな満足に浸りながら、なにも奪われることのない空想の自由な力を自覚」したのであった。こうして彼はある朝、今日はカールという名の十八歳の王子になってやろうと決心して目を覚めた。「私はある愛すべき大公の衣装をつけ、司令官や副官と活発な対話を交わし、自分の威厳の秘密に誇らしく幸せな気分で迎いを歩きまわった。この遊びの場合、一瞬たりとも中断される必要はなく、授業を受けたたり、散歩に連れ出されたり、また童話を朗読してもらって

もよかった。それがこの遊びの実用的なところであった。そのうえいつも王子である必要はなかった。私の役はしばしば変わった。²³半世紀後、トーマス・マンの息子クラウス（彼を称えるため、「大公殿下」の王子クラウス・ハインリヒは彼の前を持って）は自分の幼年時代について次のように述べた。「実際にはそれは△遊び▽ではなかった。むしろ、大胆にかつ注意深く組み立てられた幻影の世界であり、幼年時代の神話のなかでのひとつの神話的体験だった。」²⁴

自分自身の神話や童話を創作したいという衝動は、彼が神話や英雄伝説を知った時、さらに強いものとなった。母のものだった本の表紙には、ハノー・ブッデンブロークがクリスマスマスの贈り物に貰った本と同じように、一人のバラス・アテネーが描かれていた。トーマスはホメロスやウエルギリウスの数章句をそらんじていた。神々や半神は、彼が創作した「神々の遊び」のなかでその役割を演じていた。その際の端役や舞台装置のために役立ったのが、家族のなかの子供たちであった。すなわち、

「私はヘルメスになって、紙で作った翼のある靴をはいて室内を跳び回りましたし、ヘーリオスとなって、靈妙な頭の上に乗せた金びかの光輪の釣り合いを取るのに苦心しました。また、アキレウスになって、否応なしにヘクトルを演じさせられた私の妹をつかんで、容赦なく三度トロイの市壁のまわりを引きつりまわしました。でもゼウスになったときは、小さな赤いラック塗りの卓を神々の居城に見立てて、そのうえに立ち、巨人族がオッサ山のうえにペリオン山を積み上げようと徒勞を続けているのを目の当たりにしているかのように、おまけに鈴まで縫い付けた赤い手綱を手にして、いかにも腹立たしげに、しきりと電光を発したものです。」²⁵

好戦的なアキレウスは勿論まもなく、ちよつとした格下げとなった。というのはトーマスは彼の「情愛をこめて愛した」揺り木馬にこの名前を与えていたからである。幼年時代の最も早い頃でさえも、トーマスは明らかに戦士の役を好まなかった。彼は、母がアンデルセン童話やメクレンブルク低ドイツ語で書かれたフリッツ・ロイターの小説を読んで聞かせてくれたり、音楽を奏でてくれたりする時、その母に耳を傾けるのを最も好むような夢想的な子供であった。母がシューベルト、

シューマン、ブラームス、リストの歌を歌ったり、ペヒシュタイン演奏用グランドピアノでショパンを演奏したりする間、彼はよく何時間も、明るい出窓のある部屋のなかの薄灰色のキルティングのしてある安楽椅子のひとつにうづくまるように腰かけているのだった。

だが、こうした余暇の時間は例外だった。普通、母は忙しい主婦として大邸宅をきりもりしていた。マン家の舞踏会用大広間の平土間ではリユーベックの駐屯軍の将校たちがダンスを踊ったり、その地の都市貴族の娘たちに言い寄ったりしていた。母のユーリア・マンはその若さにもかかわらず、彼女に割り当てられた公的な役割りを果たさねばならなかった。彼女は「家柄にふさわしい態度をとらねばならなかった。このことは、彼女の夫がこの町の最高の委員会であるリユーベック市参事会員に選ばれ、すぐその後益々重要な公職に任ぜられた一八七七年以降にはもつと強く求められるようになった。『ブッデンブローク家の人々』の冒頭に大変詳細に描写されているような種類の公式の晩餐を催すこと、並びに他の家庭での似たような催し物に参加することは、こうした重要な公職にある人物にとつて義務であつた。子供たちは子女の世話に任された。だが家事のやり繰りはいつも、トーマス・マンが呼んでいるように「市民的」だったので、子供たちは母を比較的しばしば目にするこゝろがあつた。

そのうえマン家の子供たちは、非常に祖母のエリーザベト・マンに親しみを感じていたので、メング通り四番地の、マリエン教会の影のなかにある祖母の家に出入りした。ここで彼らは短期間、『ブッデンブローク家の人々』のイーダ・ユングマンにあたるイーダヒエン・シュプリンガーの監視の中に置かれた。子供たちの訪問は大変しばしばだったので、トーマス・マンはこの、「十八世紀に建てられた、ロココ調の切妻壁の△主よ、守り給わん▽と格言の刻まれている古い家族の家」を第二の我が家と呼んでいる。小説『道化者』のなかでは、トーマス・マンはこの標語△主よ、守り給わん▽を△祈り、そして働け▽に変更したが、その他の祖母の家、広い石造りの踊り場、白いラック塗りの木の歩廊、柱廊、「古典的」な壁布や青い背景に浮き出る白い神々の姿のある居間などは忠実に描いた。

一八八一年——この年に母ユーリアは第四子を生んだ——市参事会員マンはベッカーグルーベ五十二番地の土地を買い、そこに六人の家族のために、そして十九世紀末には市民的な家政を滞りなく機能させるためには欠くことのできないことと見なされていた、たくさんの女中や召使のために堂々とした「身分や地位にふさわしい」家を建てた。トーマス・マンは『ブッデンブローク家の人々』の第二部に親しみを込めて、使用人に関する問題のこうした観点について面白おかしく述べ（使用人たちの仕事の半分は一家の構成員が非常に多いために生じた）、ベツィ・ブッデンブロークは夫に、三人の女中たちだけでは仕事をこなすことができないので一人召使が必要であると提案している。ベツィの両親は大変浪費癖のある暮らしをしていたため、ベツィはブッデンブローク家の比較的慎ましい生活になかなか慣れることができなかった。生活は芸術を模倣するものであり、我々はこの長編小説のなかに描かれている状況が、十年足らずのうちにトーマス・マン自身の家政を支配するようになる状態を先取りしていることを楽しみながら確認できよう。トーマス・マンも同じように、両親が豪勢な暮らしをしている一家の相続者である娘と結婚後、四人の召使を使って家政の責任をもつ主人として暮らすようになった。

一八八二年から一八八九年まで、トーマス・マンはプセニウス博士のいわゆる「六年制ギムナージウム」に通った。この学校についての資料は保存されていないので、我々は彼自身の証言によるしかない。「私は学校というものが嫌いで、学校の要求には最後まで応じなかった。」²⁷おそらく、これは基礎学校時代のことというより、むしろそれより上の課程における数年間についてのものだったろう。後の実科ギムナージウムになって初めて、彼は二度も進級をストップさせられたのであった。

学校での苦勞や困難に対する慰めを彼は海に、バルト海に見付けた。彼自身の証言によれば、家族がバルト海の海水浴場トラーヴェミュンデで過ごす習慣になっていた夏休みの四週間は、彼の幼年時代のなかで最も楽しい時期であった。そこで彼は、自然の深い欲求に従うように夢想に耽ったり、物事をあれこれ考えてみたりする時間をもつことができた。彼は好き

な時に本を読み、テオドル・シュトルムの憂鬱なロマン主義やアーダルベルト・フォン・シャミツソーの空想小説のなかの不思議な出来事や、ハインリヒ・ハイネのほろ苦い皮肉に没頭することができた。ここで彼は自由に、海辺のデッキにチェアに寝そべて休んだり夢想したり、音楽を聞いたり、或いは海辺を散歩したり、琥珀を探したりすることができた。この十六と十七歳の間の夏のことを回想しながら、彼は五十歳の時、次のように書いた。

「私は海を、バルト海を、子供のときにトラヴェエミュンデで、ビーダーマイアー式の古いホテルとスイス風の家屋と音楽堂とがあつた四十年前のトラヴェエミュンデで初めて見ました。その音楽堂では長髪でジプシーじみた背の低い楽長へスガ、その楽団を指揮して演奏していましたが、私はツゲの夏らしい香を嗅ぎながら——音楽を、どんな性質のものであろうとも、ともかく初めて聴くオーケストラ音楽を、倦かず私の魂に引き入れながら、音楽堂の階段にうずくまっていました。ここトラヴェエミュンデで、休暇時の天国で、私は疑いもなく私の一生の最も幸福な日々をなん日もなん週間も過ごしましたが、その間の深い満足と何も望むことのない状態とは、今日ではもはや貧しいとは呼び得ない私の生涯にその後起こつたどのようなことによつても凌駕されなかつたし、忘れさせられなかつたものです。——ここで、海と音楽とが私のなかで永久にある理念的結合、感情的結合となり、そしてこの感情的・理念的結合があるもの——すなわち物語に、叙事的散文になりました。——叙事詩、これは私にとつては常に海と音楽との概念に密接に結び付いた、ほとんどこの二つのものが組み合つてできた概念でした。……私も、海が、そのリズムが、その音楽的超絶が、何らかの形で私の著書の至るところにある……と考へたいのです。実際、私は海に、私の幼年時代の海に、リユーベック湾に、幾分の感謝の意を表してきたと思います。私が用いたものは結局、リユーベック湾のパレットでした。そして私の色が不透明に、輝きなく、控え目に見えると思えば、それは、子供で幸福であつたときの私の目が銀色に輝くぶなの幹のあいだから、パステルの鈍色を帯びた海と空とをじつと見詰めたせいかもしれません。」²⁸

記憶のなかに保存された彼自身の体験はこのようだった。だが、トラヴェエミュンデでの最初の休暇の喜びにハノー・ブツ

デンブロークがどのように目覚めていくのかという記述において、トーマス・マンは上記の文章を書き留める二十五年前、自分の幼年時代の楽園をもう一度ありありと思い浮かべることができた。ハノーは、自分がトラウヴェミュンデに——「四週間という推し量ることのできない期間、トラウヴェミュンデに」——いることを意識することなしに目覚め、「夢見心地の、歓喜に満ちた惑乱の」ひとときに浸っている。彼は静かになにもすることのない気楽さのなかにあり、保養所の庭の砂利道が熊手でかきならされる音や、巻き上げブラインドと窓の間に引つ掛かっている一匹の蠅のブンブンという音に耳を傾けている。これは「海水浴場のあの落ち着いた、手入れの行き届いていて上品な、世間から遠ざかっている生活」²⁹の感覚であった。ハノーは自分の短い人生において、この思い出を他のすべてにままして好んだ。そしてそのハノーの創作者トーマス・マンもまた、彼自身の長い生涯において、保養地を好んだ。

保護され、上品に——ドイツの市民精神は十九世紀の最後の十五年、その優遇された地位を享受した。そこでは限りなく豊かな食事、保養地の教会の朝や午後や夕べの音楽番組、クロツケーの一勝負、家畜小屋のおとずれが繰り返された。それは子供の夢であり、二十八日間だけ続く永遠だった。トラウヴェミュンデにおいても当然、監視がないわけではなかった。というのもイーダ・シュプリンガーも一緒に来ていて、子供たちに注意を払い、泊まらずにもつぱら日曜日の遠足のためにだけやってくる訪問者たちをからかったりしていたからである。彼らのことを彼女は「善良な中流階級出のカゲロウ」と、人の良い軽蔑さを見せながら呼んだが、このことはトーマスを大変面白がらせた。そして至るところ海ばかりであった。

「しかし最も賢明なのはいつも、海の方へ引き返し、まだ薄明かりの残っている頃に顔を広々とした水平線の方へ向けて防波堤の先端に腰を下ろし、通り過ぎる大きな船にハンカチを振り、小さな波が岩塊に打ち寄せてびちゃびちゃおしゃべりをしたり、広大な海一面が和やかで雄大などよめきに満ちている、そういう物音に聴き入ることである。……ハノーは海からいつもなんと和らいだ、満ち足りた、そして気持ち良く規則正しく鼓動する心臓をもち帰ったことであろう！そしてハノーは、牛乳か麦芽をたっぷりつかった黒ビールを飲みながら夕食を部屋で済ましてしまうと、その後母親がホテルのガラス張

りのヴェランダに出て他の客を交えて食事をしている間に、ベッドの古くて薄くなつたリンネルに再びくるまる。するとたちまち、まさにこの満ち足りた心臓の和やかな力強い鼓動と夕べのコンサートの控え目なリズムに合わせて、恐怖に襲われることもなければ発熱も伴わずに眠りがハノーの上に降りてくる……」³⁰

彼は眠りを愛した。『甘い眠り』というタイトルのトーマス・マンのほとんど知られていないエッセイがある。それはモルペウス（夢の神）に敬意を表した一種の散文詩である。彼はその中で一日の苦勞や悲しみや不安を引き寄せる夜を歌っている。楽しい海水浴場と同様に、疲れた身体に活気と慰めをもたらすものとして。「というのは、私は忘れることをまだほとんど持たない頃すでに、眠ることと忘れることを愛した記憶があるからです」³¹と彼は書き、眠ることの出来ない男の童話を耳にした後、この傾向がどのようにして意識的な愛好へと沸き上がっていったかを思い出している。眠り、夜、海、死——それらは互いに緊密に結びあつていて交換可能であり、混り合つて彼の意識的な思想や、彼の作品を貫く無意識な流れのなかへ流れ込んでいる。

トラーヴェミュンデでの最初の日は、海そのもののように無限なものであつた。しかし時は無慈悲に過ぎていき、まもなく帰る日がやつてきた。「荷物の積まれた辻馬車が保養所の前に止まったのである」³²学校への帰還は延期されることはなかつた。だがハノー・ブッデンブローク同様、トーマス・マンにとつても、学校はもつぱら、ただ耐え難い授業や横暴な教師からなるものではなかつた。学友たちが彼には非常に多くの意味をもっていたのだった。

(原注)

トーマス・マンの作品からのすべての引用は、一九六〇年にS・フィッシャー出版(フランクフルト・アム・マイン)から出版されたトーマス・マン全集十三巻に拠る。ローマ数字で巻数を、それに続いて頁数を示す。

トーマス・マンの作品の後の括弧内の数字は、作品の初版年であるが、またいくつかの箇所では成立年の場合もある。

1. トーマス・マン『精神的生活形式としてのリユーベック』(一九二六年) XI、三九二頁。
2. トーマス・マン『ファウストウス博士』(一九四七年) VI、五十二頁。
3. トーマス・マン『略伝』(一九三〇年) XI、一二九頁。
4. トーマス・マン『精神的生活形式としてのリユーベック』 XI、三八六頁。
5. ウルリヒ・デイトツェル(編)『マン家の歴史資料』『意味と形式』トーマス・マン特別号、ベルリン、一九六五年、十頁。
6. トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』(一九〇二年) I、五十八頁。
7. トーマス・マン『魔の山』(一九二四年) III、三十六頁。
8. ヴイクトル・マン『我々は五人だった』、コンスタンツ、一九四九年、十二頁。
9. トーマス・マン『手紙、一八八九—一九三六』エーリカ・マン編、フランクフルト・アム・マイン、一九七九年、三頁。
10. トーマス・マン『精神的生活形式としてのリユーベック』 XI、三八六—三八七頁。
11. トーマス・マン『略伝』 XI、九十八頁。
12. ユーリア・マン『ドドーの幼年時代より、回想』(一九〇三年) コンスタンツ、一九五八年、六十五頁。
13. 同右、七十一—七十二頁。

14. 同右、補遺。
15. トーマス・マン『生の経歴、一九三六』、XI、四五〇頁。
16. 同右、四五二頁。
17. トーマス・マン『手紙、一九四八—一九五五』エーリカ・マン編、フランクフルト・アム・マイン、一九六五年、三九七頁。
18. トーマス・マン／ハインリヒ・マン『往復書簡一九〇〇—一九四九』ハンス・ヴェスリング編、フランクフルト・アム・マイン、一九六八年、一一三頁。
19. トーマス・マン『手紙、一九四八—一九五五』三九七頁。
20. トーマス・マン『子供の遊び』（一九〇四年）XI、三二七頁。
21. 同右、三二八頁。
22. トーマス・マン『道化者』（二八九七年）VIII、一〇九—一一〇頁。
23. トーマス・マン『子供の遊び』XI、三二八頁。
24. クラウス・マン『転回点』（一九四二年）フランクフルト・アム・マイン、一九六三年、三十一頁。
25. トーマス・マン『子供の遊び』XI、三二八頁。
26. トーマス・マン『生の経歴、一九三六』、XI、四五二頁。
27. トーマス・マン『略伝』XI、九十九頁。
28. トーマス・マン『精神的生活形式としてのリュールベック』XI、三八八—三八九頁。
29. トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』I、六三〇頁。
30. 同右、六三三—六三四頁。

31 トーマス・マン『甘い眠り』(一九〇九年) XI、三三四頁。

32 トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』I、六三五頁。

*本稿はRichard Winston: Der junge Thomas Mann. Das Werden eines Künstlers 1875 bis 1911. (Aus dem Amerikanischen von Sylvia Hofheinz), Frankfurt/M, Berlin, Ullstein, 1987. の第一章 Vorfahren und Kindheit の全訳である。本書の原典は一九八一年、アメリカ英語で書かれ、そのタイトルは Thomas Mann, The Making of an Artist, 1875-1911 である。その後、一九八五年に Albrecht Kraus 出版 (München und Hamburg) から Thomas Mann Das Werden eines Künstlers 1875-1911 Von seiner Kindheit bis zur Entstehung von 《Tod in Vendig》と云うタイトルで初めてドイツ語訳で出版された。本稿の訳出しには一九八七年版のタイトルを用いた。以下、一九八五年版の同書に付された、本書と著者の紹介文を訳出しておく。

「歴史作家であり、ヨーロッパ五ヶ国語の翻訳者であり、さらにトーマス・マンの手紙の一卷の編集者であるリチャード・ウインストンは、作品や個人的な発言、当時まだ公になっていなかった日記などの詳細な知識から、このトーマス・マン伝を書いた。フリッツ・シュトリヒを初めとする彼の先達たちの誰も彼ほどに、厳格ではしばしば堅固ともいえる市民性の顔をもったこの作家を、彼の精神の隠れた動きまでも含めてこれほど事細かに描き切った者はいないであろう。したがって、この本の読者には新たに、トーマス・マンにおける幼年時代や兄ハインリヒに対する愛憎定まらぬ思いの数年、カーチャ・プリングスハイムへの深い愛、不幸な妹ユリアの運命、永久に彼の心に刻み付けられていることすべて、そしてこの緻密で自己批判的な作家の生から彼の作品にいたるすべての事柄などが明らかになるであろう。

リチャード・ウインストンが一九八〇年に亡くなった時、彼の原稿は『ヴェニスに死す』まで進んでいた。この小説で三十六歳のトーマス・マンは、初期の熟達した巨匠の高みに達していること、そして作家であり道徳家である自分の生涯が次

の数十年のうちにどのように形成されていくかを、誰の目にも明らかなものとした。ウインストンの重要なひとつの功績は、トーマス・マンの初期という一時期を非常に緻密に、しかも大いなる感受性を駆使して究明した点にある。この究明には、日記はもはやなんの情報も提供していない。トーマス・マン自身がそれを破棄しているのであるから。

リチャード・ウインストンは一九一七年、ニューヨークに生まれた。一九三〇年代後半以降、アメリカ合衆国で生活したトーマス・マンに、すでに若い頃から彼は魅了されていたのである。彼の妻クララは彼のたゆまない協力者であった。」